Sun 14

Spring 2022

茨城県
東茨城郡
茨城町

まちとつながり

寒明　朝ぼらけの光　碧落（へきらく）の山嶺を蒼く照らし

膨ら蕾　季の移を静かに示す

光風　地を駆け抜け　遷を呼び

地の歩み　様々に彩り　粛々と続いていく

Sunは　茨城町と　ゆるやかにつながる　いくつもの縁を

人々の暮らし　情景と共に　綴り伝えていきます

撮影場所:上石崎地区

Cover
“変わらず 立ち続ける”
厳冬の夜明け。
凛とした空気の中、丘の上に小さな森を見つけました。
朝日を受け、刻々と変わる木々の表情に
うちに秘める生命の力強さを感じました。

※取材に際し、一部マスクを外しての撮影をお願いしておりますが
新型コロナウイルス対策を十分に講じたうえで、取材に臨んでおります

Contents　目次

03 特集一 風にあう
08 地域に吹く風
これからのまちに必要なこと
09 まちで暮らす人 まちを想う人
15 晴耕雨考
ー湖畔で揺れるハーブたちー
17 連載　マチのケシキ
18 編集室から

茨城県
東茨城郡
茨城町

Sun 14
Spring 2022

特集 風にあう

構成｜石川聖太
文　｜二川ナオミ
写真｜竹内慎

風は 同じ場所にとどまらず
ある場所へと吹き続けます
一つの想いが風を生み出し
その風を受け　新たな風を呼ぶ
まちに吹く　新たな風を探しに
倉本商店さんへ伺いました

軽トラ、軽トラ、大型トラック

茨城町小幡地区にある倉本商店には契約農家からひっきりなしに大量の野菜が運び込まれてきます。大きなコンテナに入ったままフォークリフトで手際良くトラックの荷台から運び下ろされた野菜は、計量器に載せて重さを量り、そのまま高く積み上げられていきます。

作業の傍らには、泥のついた人参の葉を切り落とす人たちの姿。働くのはみなさん地元の方ばかり。「〈今日仕事があると〉もうちょっと早く声かけてくれるといいのに〜」「急なんだもの〜」と言いながら、葉を落とした人参の入ったコンテナが瞬く間に積み上がります。作業所に置かれた大きな洗浄機の中では大量の人参がグルグルと回り、あたりには人参の甘い香りが漂います。この日は工場からの急な発注変更で朝から大忙しのようです。

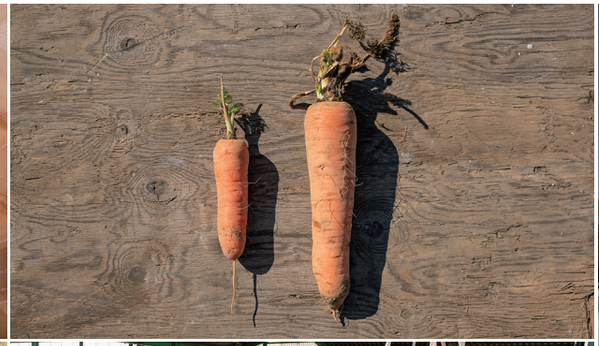
二月初旬、連日大量の野菜が運ばれてくる倉本商店ですが、秋になると一変、収穫された米の袋で倉庫が埋め尽くされます。もともとは米の検査・保管所でしたが、先代社長の倉本幸益さんが本業の落ち着く期間を活かし露地野菜の卸売事業を始めました。今では地元をはじめとする二〇軒あまりの農家と契約し、年間を通じ野菜が集まります。六年前に幸益さんが亡くなり、今は妻の園美さんが後を引き継いでいます。二〇二〇年には娘の衣織さんも加わり、倉本商店に新しい風が吹き始めています。

野菜のゆくえ

倉本商店で取り扱う野菜は、夏はジャガイモ、冬は人参や大根といった根菜類がメイン。一年を通じ一〇種類程度の野菜を扱っています。

大量に運び込まれる野菜は、倉本商店と契約する近隣の農家や自社の圃場からやってきます。加工に使われる野菜のため、スーパーで見かけるものより大きいのが特徴。重さを基準に取引がされるので、色や形などの規格にとらわれずに出荷できるのが契約農家のメリットでもあります。集められた野菜はカット工場へと運ばれ、豚汁や肉じゃがなど、料理を手軽につくることができる水煮に加工されるそうです。

野菜の種類により納品量と加工に必要な量が増減することも多く、同じ野菜を一〇トン納品しても実際に使える部分が想定よりも多かったり少なかったり。そんなことが日常茶飯事なので、工場からは毎日のように急な発注変更の連絡が入ります。追加があれば自社の圃場から掘り出したり、キャンセルがあれば冷蔵室で貯蔵して対応するのだそうです。



地元のために

野菜の卸売事業を立ち上げたのは先代の幸益さんの時代。幸益さんは大学卒業後茨城町に戻り、家業を継ぎました。従来の家業以外に何か地元で役立つことはできないかと考え、野菜の卸売事業を立ち上げました。

「市場に出まわる農作物は規格品のみなので、丹精込めて育てた作物であっても口スは避けられません。『畑からできるものはすべて販売につなげたい』という先代の想いから、今の経営スタイルになりました」と、妻であり現代表の園美さんは言います。

「夫は地元をすごく大切にしていましたし、地域への貢献が好きな人だったと思います。地元に恩返しがしたい、盛り上げたい、という想いが強い人でした。事業が大きくなるにつれてお世話になる人が増え、貢献したいと思う範囲も広がっていき、『地元ってどこまでが地元なんだろう?』と笑いあったのを覚えています」。

取引先も町内から県、関東、全国へと拡大する中で、ゆくゆくは日本の米を海外で販売したいとも考えていたそうです。

想いを引き継いで

そんな先代が六年前に他界し、現在は妻の園美さんが後を引き継いでいます。

園美さんが茨城町に嫁いできたのは今から三〇年ほど前のこと。結婚前から幸益さんに誘われて、選挙のウグイス嬢を務めるなど、しばしば町に足を運んでいたそうです。「選挙期間中、車に乗って町内を隈なく回ったんですよ」と笑いながら教えてくれた園美さんは神奈川県出身。結婚するまでは実家で三味線の師範をしていました。

「当時は農業に関わる仕事に興味があったわけではなかったですね。夫と一緒にいられるなら仕事はなんでもよくて、仮に家業が自動車屋さんだったらそれを手伝っていたと思います」と語る園美さん。ご自身が代表を務めるようになってからその意識も変わっていったのだそうです。

「代表になるまで、自分は何かを考え過ぎて胃に穴が開くようなこととは無縁のタイプだと思っていました。夫がいた頃は、仕事を手伝いこそすれ、どこか他人ごとで責任がなかったわけですから。夫がいなくなって、いろいろなことが自分ごととなって初めてその責任を感じるようになりましたね。やらざるを得なくなってしまった、というのが私がこの会社の後を継いだきっかけでしたが、今では、個性豊かで面白い従業員や農家さんたちと一緒に働けることがとても楽しく幸せで、支えになっています」。

そんな倉本商店に、二年前から長女の衣織さんが加わりました。衣織さんは寮のある中高一貫校への進学を機に茨城町を出ました。都内の大学に進学し、卒業後に会社勤めを経て青年海外協力隊に参加し、モザンビークへ。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により帰国を余儀なくされ、町へ戻ってきました。昨年からは仲間を募り、倉本商店だからできることを活かした新しい活動の芽が出始めました。

5ページ:右から／作業を手伝う近所の人たち。手際良くあっという間にコンテナが人参の葉でいっぱいに。／葉を落とした人参は洗浄機できれいに。
6ページ:右上から／加工野菜用の人参。私たちが普段目にするものよりかなり大きい。／洗浄された人参はフレキシブルコンテナという大きな袋に詰められる。／パレットを出す作業も手慣れたもの。／コンテナを計量器に載せ重さを記載していく。

右から／田舎ホームステイに参加した大学生と衣織さん。／米人図鑑にはプロフィールと参加した感想が並ぶ。／ご近所の方から差し入れが。撮影中、二人の周りにはたくさんの人の笑顔がありました。

母と娘が創る、新しい風

衣織さんは青年海外協力隊派遣先のモザンビークから帰国後、フリーランスの広報として活動する傍ら、家業とご自身の感性を活かした活動を展開しています。

帰国後すぐに始めたのは〝田舎ホームステイ〟。倉本家で共同生活をしながら農作業をする体験に参加した人たちが残したアルバム〝米人図鑑（こめびと）〟には、楽しそうに農作業をする姿や、みなで食卓を囲む写真が貼られ、多くのメッセージが残されています。二〇二一年四月からは農業の直面する課題に関心のあるメンバーを募り、エンターテインメントの視点から課題解決にチャレンジする〝米つぶ、プロジェクト〟（以下米つぶ）という活動を展開しています。

米つぶでは、ゲームでつくったお米が実際に手元まで届くというアプリの開発を行っています。すでにプロトタイプは完成し、さらに改良を加えてリリースを目指しています。「米つぶのメンバーには貢献のお礼としてお米や農産物しかお返しできていないのですが、それでも構わないと共感した人たちが協力してくれるのでありがたいです」と衣織さん。

二〇二二年からは、倉本商店のメンバーとなり広報活動を担当しています。父が築き母が守ってきた企業相手のビジネスに加え、一般の方向けに農業体験を提供するサービスを展開したいと考えているそうです。「倉本商店での仕事はまだ収益が出せていないのでノーギャラです。出勤時間も自由。自分の収入はライスワーク（食べるための収入源）であるフリーの仕事で賄い、倉本商店では自分のライフワーク（やりたいこと）をやらせてもらっている、という感じです」。

先代の想いを引き継ぎ、枠に捉われず新しいことに挑戦する二人。

「私が今の仕事に向き合うとどうしても生産者側の目線に立ってしまいますが、娘は消費者的な視点が強いので、そこに大きな価値や可能性があると思っています」と園美さん。

「食べること＝幸せ。だから、食べ物をつくる農家さんは〝幸せメーカー〟だと思っています。倉本商店の事業を通して、そんな素敵な農家さんの仕事を伝えていく架け橋になりたいです」と衣織さんは語りました。

株式会社倉本商店　Instagram　@kuramotoshouten
米つぶ、プロジェクト　kometsubu-project.mystrikingly.com

地域に吹く風

――これからのまちに必要なこと

地元の農家を想い、新しい事業を立ち上げた先代幸益さん、その想いを継いだ妻の園美さん、枠に捉われない柔軟な発想で新しいことに挑戦する娘の衣織さん。

関わる人々の想いや個性が、先人たちの紡いだ生業に新しい風を送り込み、代謝を繰り返す。それは、世代を超えて残るものに共通する在り方なのかもしれません。このことは「まちづくり」についても言えることではないでしょうか。

私たちが追いかけているのは茨城町の魅力、あるいはその原石といった、いわば「地域の文化」と言えるもの。まちづくりや地域活性化、地方創生といったものがアプローチすべき本質は、地域の成り立ちとその現状を把握した上で、地域の文化がこれからどうあるべきか〝再考〟し、時代に合わせてどのように残していくかを〝構築〟することなのではないでしょうか。

地域の文化とは必ずしも守るだけのものではなく、新しく見つけたり、磨いたり、時代に合わせて変化＝代謝させることで、次世代へ継承されるものなのだと思います。

「あなたのまちにはどんな魅力がありますか」と聞かれたら、あなたは何と答えますか。もし、外からやって来た人にこのまちの魅力を尋ねたら、きっとあなたとは違う答えが返ってくるでしょう。視点を変えれば、地域の魅力や価値は意外なところから見つかるかもしれません。見落としていた「地域の文化」が持つ新しい可能性を模索し、アップデートしていくことが「これからのまちづくり」にとって重要な足がかりになりうるのです。

この先、私たちに吹く風は向かい風かもしれませんし、追い風かもしれません。今まで当たり前であったものはそうではなくなり、全く新しい常識へ変わるかもしれません。たとえそんな時代が来たとしても、本質を見失わず、新しい風を取り込みながらまちを代謝し続けることが、「これからのまちづくり」にとって大切なことの一つになるのではないでしょうか。

まちで暮らす人
まちを想う人

— Feeling × Thinking

練習会場の玄関をくぐると、女声コーラスの優しい音色が聞こえてきました。静かにドアを開けると、女性たちが等間隔に並び、発声練習をしています。レッスンに参加するのは、茨城町や近隣市町村から集まる六〇～八〇代の女性たち。手元のファイルはしっかり使い込まれ、椅子に掛け置かれた上着や鞄の隙間からはボイスレコーダーが見え隠れしています。毎週水曜日の午後は茨城町しじみ合唱団の練習日。指揮者の原田昌江さんにお話を伺いました。

心がこもる合唱団の歌声

私がこちらで指揮をするようになってから、もう二〇年ほど経つと思います。ほかの合唱団等でも指導をしていますが、その中でもしじみは毎回指導に来るのが楽しみな合唱団です。特別レベルが高いというわけではないのですが、みなさん素直で明るく楽しくて、楽譜に縛られず自由に歌うし、しかもなんとも言えない歌心があるんですよね。例えば今「あの鐘を鳴らすのはあなた」という曲を練習しているのですが、その歌い出しに「あなたに逢えてよかった」という歌詞があって、特別な指導をしたわけではないのに心がこもっていて、とても素敵なんです。

音楽との出会い

私が子どもの頃はちょうど、あちこちにピアノ教室ができ始めた頃でした。家にはアップライトピアノがあり、私に音楽を習わせたかった母が毎月アップライトピアノの月賦を払いに銀行へ行っていたのを覚えています。幼心に、無理させてるのかな？と思っていましたが…当の私はあんまり練習が好きではなくて、教本は習い事バッグに入れっぱなし（笑）。レッスンの帰り道には来週こそしっかり練習してくるんだ！と、いつも反省をするのですが、一週間経つとまた同じことを繰り返していました。けれども、教室に通うのは好きだったんです。

自分の家とは全く違う教室の雰囲気や音楽のある環境に、幼いながら憧れていたのかもしれません。

中学では吹奏楽部でフルートもやっていましたが、高校は普通科に進学しました。大学進学を見据えたときに、さてどうしようと考えていたところ、母の知り合いを伝って、当時他校のコーラス部を指導していた中澤敏子先生と出会いました。先生の前で歌うと「歌を歌ったらいいんじゃない！」と言われたのがきっかけで声楽を始めることになりました。それからは学校が終わると、指導を受けるために先生のご自宅で帰りを待つ日々。私のほかにも同じような仲間がいて、待っている間に一緒におやつを食べたり、先生からの頼まれごとをこなしたり。東京からやってくる先生からレッスンを受ける機会もありました。音楽漬けというわけでもなかったので、私が音楽を学ぶ環境としてはちょうど良かったのかもしれません。

その後、武蔵野音楽短期大学部を経て武蔵野音楽大学へ編入。プロとして活動する先生方の指導をはじめ、留学をした人やする人たちとの交流、音楽の研究会へ所属など、レベルの高い音楽に囲まれた大学時代を過ごしました。卒業後は大手の音楽教室で、三年ほど子どもたちを相手に電子オルガンやピアノを教えていました。当時は仕事をこなすことで精一杯でしたが、たくさんの子どもたちを同時に相手にする経験は、児童合唱団で教えるのに役立ったと思います。

しじみとの出会い

教室を辞めた私は、高校生のときにお世話になった中澤先生が指導する「水戸うらら女声合唱団」にヴォイストレーナーとして参加していました。その合唱団のメンバーの方から紹介されて引き受けたのが、しじみ合唱団の前身である長岡小学校ＰＴＡコーラスの指導でした。その頃はまだ町の教養講座としての位置付けで、特に団体名はなかったのですが、合唱連盟に加入するのをきっかけに誰からともなく「茨城町しじみ合唱団」という名前が付けられました。途中、改名の提案もありましたが、なんだかんだ〝しじみ〟の名前で今も活動を続けています。

練習場所であった町の中央公民館には当初ピアノがなく、メンバーみんなで署名活動をし、ピアノを設置してもらったと聞いています。ほかにも、ステージの床が傷まないようにピアノの昇降機を要望したり、有名な先生を招いて練習会を開くなど、しじみにはいろいろな歴史があります。県の合唱祭や町のイベントで歌ったり、これまでつくったステージ衣装はきっとどこの団体よりも多いんじゃないかしら。コロナの影響で一番新しい衣装にはまだ袖を通せていないので、メンバーみんなでその日が来ることを楽しみにしています。

まちに想うこと

ここ数年、町のホールをつくろうという話が出ています。ホールは文化の要でもあり、しっかりとしたホールが一つあればさまざまなイベントが企画されるでしょうし、町の人たちが芸術文化に触れるチャンスが大きく広がると思います。特にステージは特殊な空間で、子どもであっても、大人であってもステージに立つのはとても貴重な経験になります。しじみの発表の場としてもホールの完成は待ち遠しいですし、まちの文化を創る拠点としても、とても期待をしています。

茨城町しじみ合唱団連絡先　090-4729-8641（佐藤）

あきらめない

まちで暮らす人

英会話講師・翻訳家・カフェオーナー

文＝ホシカワリエコ

菊本純子

菊本純子さんは一九七五年茨城県水戸市生まれ。祖父の他界を機に茨城町へ移住し、小学校時代を長岡地区の祖父母の家で過ごしました。社会人となったのち海外へ留学し、帰国後は研究所などで英語を活かした仕事を経験。現在は英会話講師、翻訳の仕事を行いながら、祖父母の家をリノベーションしてオープンした〝Cafe green〟を営んでいます。

本が好きなわんぱく少女

水戸市から茨城町へ越してきた当時は、今よりももっと田舎で、自宅周辺にはあまり住宅もなく、田畑が広がっていました。自然がいっぱいの環境だったので、虫を捕まえたり、木登りをしたりと外遊びばかりしていて、女の子としては少しわんぱくだったかもしれません。しかし、それとは対照的に「家が図書館か本屋さんだったらいいなぁ」と思うほど、小さい頃から本が好きでした。母がいつも本を持ち歩いていて、読み聞かせをしてくれていたからだと思います。

子どもの頃の一番の思い出は、夏になると母がつくってくれるフルーツがたくさん入ったババロア。毎年とても楽しみで、夏が来たなと思うんです。おやつだけではなく、家ではいつも季節の食材を使った手料理が並んでいました。〝出てくる食材で季節がわかる〟…昔は当たり前だったことですが、これが私の食の基本になっています。また、両親が共働きだったこともあり、学校から帰ると自分でホットケーキをつくって食べるなど、料理もよくしていました。それが今に活きているのではないかと思います。

紆余曲折を経て

中学に進むとなぜか毎日のように遅刻をしていました。行きたくないわけではなく、時間通りに家を出ているつもりなのに、なぜか遅刻してしまっていたんです（笑）。そんな中学生活の中、面談で「高校には行かない」と言ったことで先生や親を驚かせ、なぜ行かないのかと怒られました。勉強が好きではないし、どうして無理に行かなくてはいけないのと思っていたのですが、説得されてしぶしぶ受験しました。納得できないことは嫌という性格だったので、みんなが高校に行くからという理由だけで、同じことをするのが嫌だったのかもしれません。

しかし、高校では勉強することの面白さを知り、大学に行きたいと思うようになりました。心理学系の学科を目指し勉強していたのですが、諸事情により大学進学は叶わず、専門学校を経て社会人になりました。五年ほど経過した頃、自分の将来について真剣に考えるようになり、やはり大学へ行きたいと思い、同じ費用をかけるならと思い切って海外への留学を決めたんです。当時はまだインターネットも発達していなかったので、情報収集や手続きに苦労しました。両親には猛反対されていましたが、準備を整え留学。茨城町ではない、どこか遠い場所に自分の人生があると思っていました。

念願の大学へ通い、勉強を続けていたある日、母が入院することになったので一度帰ってきてほしいと連絡を受け、休学し帰国することになりました。その後、復学を目指したのですが、いろいろな事情で難しくなり、日本で働きながら学業を継続し、学位の取得を目指しました。大人になってからの学業の道は険しく、一八歳で大学に行けば四年で終えるところを、十年をかけて目標を達成。紆余曲折ありましたが、この経験を経て「大人になってもやりたいことがあったら挑戦すべき」と思うようになりました。

新たな挑戦

昨年、空き家だった祖父母の家をリノベーションし、カフェをオープンしました。私が町に帰ってきたきっかけは、母の病気でした。離れて生活していたので、闘病中の母のことはもちろん、父のことも十分にサポートすることができませんでした。このときの経験で、離れて仕事や生活をしていては、将来的に両親の面倒をみることはできないとわかったんです。そこで祖父母の空き家を活用し、自分ができることを模索しました。会社を辞めカフェを開くと言い出したときや、茨城町に住むことにも、主人は理解を示してくれました。しかしながら、空き家の整理やＤＩＹは想像していたよりも大変で、畳を剥がして壁を抜き、階段をかけ直すなど、手探りの日々…。不安で心が折れそうになることもありました。三年がかりでなんとか形にできたのは、主人や両親、友人、知人のサポートがあったからだと感謝しています。

変わらない町で〝本と緑とコーヒーを〟

遠く離れた場所で暮らしていたときも、帰国してからも、〝ふるさと〟に対して特にあまり関心はなく、ただ自分が育った場所という認識だったのですが、お店をオープンして少し変化がありました。子どもの頃にお世話になった近所の方々がお店に足を運んでくれるのですが、お互い年齢を重ね、当時とはまた違うコミュニケーションが取れることを嬉しく感じたり、地元だからこその〝居心地の良さ〟に気づくようになったり…私自身が驚いています（笑）。

今は、無事一周年を迎えることを目標にがんばっています。これからも昔と変わらないこの町で多くの人が楽しめる場を提供し、Cafe greenという名のように、自然の中にいるような、居心地の良い場所にしていけたらと考えています。私のように本を好きな方が、ゆっくりとコーヒーを飲みながら本を読めるように、そして母がつくってくれたような季節を感じられるお菓子を楽しんでもらえるような、そんなお店にできたらと思っています。

Cafe green　茨城町長岡64　029-210-1707
cafegreenonline.com

晴耕雨考

ー湖畔で揺れるハーブたちー

写真＝アラタケンジ　文＝ホシカワリエコ

「小さな種からよく出てきてくれるよなぁと思ってね」。霜焼けで赤くなった頬を緩ませて話すのは、株式会社涸沼ハーブの里代表の児玉正輝さん。八年前に茨城町に移住してハーブづくりを始めました。朝は三時半に起床。バイクに乗って、下石崎地区に点在する畑を周ります。

ハーブはもともと野生に育ったもの。虫食いでも構わないので元気に育てることをモットーとし、農薬や化学肥料を使わずに栽培。質の良いものだけを選別して収穫し、異物が入らないように丁寧に水洗いしています。国産にこだわり茨城町で育てたハーブでつくるハーブティーは、香り高くおいしいと評判です。

観光業一筋、三五年のサラリーマン人生

愛知県で生まれ育ち、豊橋にある進学校から神奈川県の大学に入学。飛行機が好きで、航空宇宙工学を学びエンジニアを志しましたが、昭和五四年頃はまだオイルショックの影響もあり、思うような求人はありませんでした。「これからの時代はモノよりサービスだ！」と頭を切り替え、観光業に身を置くことを決意し、旅行業やリゾート開発など観光全般を扱う企業に入社。海外へ出向き四ツ星ホテルの買収などに関わるほか、単身赴任で長く勤めていた、福島県猪苗代湖のほとりのリゾートホテルでは、宿泊するお客さんが楽しめるようにと観光ハーブ園をオープン。役員として農業法人の運営にも携わりました。

神奈川県川崎市に住んでいた三〇代の頃、奥さんが応募した市民農園に当選し、野菜づくりを経験しました。種から発芽して大きく育っていくことに喜びを感じ、楽しくて夢中になってしまったそうです。そのときの経験をもとに、六五歳になったらリタイアし、農業で生活をしたいと考えていました。

ところが二〇一一年に東日本大震災がおこり、それを機に予定よりも早く五七歳で退職。川崎の自宅に戻り奥さんと今後の相談をし、第二の人生をスタートさせることになります。

風光明媚な涸沼の風景に魅かれて

退職後はハーブを育て、観光ハーブ園をやりたいと思うようになり、首都圏から近くて雪が降らず、観光的な要素がある場所を探しました。「福島の職場に茨城町出身の方がいて『町には涸沼があって…』と聞いていて。何度か足を運んで、いいところだなと思っていたんです」。決め手は涸沼。そして単身で茨城町に飛び込みました。

やればできるだろうと考えていたけれど、いざ始めてみるとハーブの栽培は難しく、半年間収穫もできず、ネット販売を始めても注文はなし…。直売所でドライと生のハーブを販売しますが、売り上げは伸びません。

「あるときお客さんに『たくさんハーブを育てているんだから、自分でブレンドしてハーブティーをつくってみたら』と言われて…」。空のティーバッグにハーブを入れて、口をとじて。自分で加工ができるとわかったので、ハーブの持つ力を活かした組み合わせを考え、試行錯誤してブレンドハーブティーを開発。こうしてお客さんの声をもとに完成したハーブティーを販売すると、おいしいと口コミで徐々に広がっていくようになりました。

児玉さんのオリジナルブレンドハーブティーは人気がありリピーターも多い。ハウスの中には数多くのハーブが、春に向けて芽を出してくるそう。

ハーブの里を夢みて

昨年、縁あって茨城町のファンクラブ「いば3ふるさとサポーターズクラブ」と、茨城町のおみやげとして〝マチノハーブティー〟を共同開発。現在町内外で販売中です。

「町の定番のおみやげをつくりたい」と初めて相談されたときには、まだクラブのことなど何も知らなかったという児玉さん。プロジェクトに参加した感想はと尋ねると「私の夢は涸沼ハーブの里という社名のとおり、ここにハーブ園をつくること。まったりと過ごせるカフェからラベンダー畑や涸沼が見える…そんなハーブ園をつくりたいんです。今回みなさんと活動することで、その想いが強くなり、夢に向かって後押ししてくださる大きな力になりました。涸沼のほとりの土地をお借りしてチャレンジしたいですね」と笑顔で答えてくれました。

川崎に一人で暮らしている奥さんを気づかい、毎日連絡しているそうですが、夢を叶えるため、まだしばらく離れて過ごす日々が続きそうです。児玉さんが未来に想い描くハーブの里の実現を楽しみにしています。

株式会社涸沼ハーブの里　茨城町下石崎2355　029-293-7553
hinumaherbland.com

町のサイクリングガイド 最新号が完成!!!

いば3のサポーターが制作に関わった
「Go!Go! FUNRIDE イバラキマチ」の
最新号が完成しました!
町内のサイクリングスポットなどを
紹介しています。
茨城町役場にて現在配布中です。
これからの季節、サイクリングガイドを手に
自転車で出かけてみませんか?

@gogo_funride
インスタグラムアカウント

From Sun –編集室から–

Sun 第14号をお届けします。

今回は風というテーマで取材しました。特に関連付けたわけではないのですが、海外に行った方も…。遠くに行った後に町に戻ってきて、新しい風をおこしてくれているので、それをきっかけに、もっと大きな風を創りたいと思いました。[ひで③] ／昨年オープンしたCafe greenさんを取材しましたが、取材をする中で、町に対する愛着心、家族に対する想いなどがあってオープンすることができたのだなと思いました。後ほどプライベートでもお邪魔したいと思います。[MTBIG3] ／だんだんと暖かくなっていく風は、季節の移ろいが感じられて好きなのですが、同時にのってくる花粉にはあいたくありません…。[がっきー3] ／私も小さい頃から本が好きで、お小遣いを貯めたらいつも本屋さんに行っていました。社会人になってからはゆっくり読む時間が取れませんが、Cafe greenさんで落ち着いた時間を過ごしたいですね。[シロクマさん] ／風が強い日が好きです。子どもの頃、外で強い風に当たるのが好きでした。傘をさして風に乗ろうとして、盛大に飛ばされたこともあります(汗)。強い風に吹かれていると、遠くの知らない地まで飛ばしてくれる…そんな気分になります。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。
いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト　town.ibaraki.lg.jp/iba3

Sun 第14号 春号 2022年3月10日発行
企画・発行:いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080
TEL:029-240-7148 MAIL:iba3@town.ibaraki.lg.jp
編集・アートディレクション・デザイン | i,D
取材・出筆 | 二川ナオミ ホシカワリエコ 石川聖太
写真 | 竹内慎 アラタケンジ 絵 | やまなかももこ 石川聖太
印刷・製本 | 株式会社光和印刷
本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

参考文献
茨城町史 地誌編
Special Thanks [順不同]
茨城町しじみ合唱団のみなさん
倉本商店のみなさん

“いば3”ではサポーターを募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は
いばらきまちがつくるあたらしくて
ゆるやかなつながりの場。
設立から6年目を迎え、
会員数は950名を突破!
ますます盛り上がる“いば3”と
みんなでつながろう!!!

お申し込みはこちらから
town.ibaraki.lg.jp/iba3

いば3 WEBサイト

連載
マチのケシキ

第14回 残していくもの

絵 | やまなかももこ 文 | 石川聖太

絵:やまなかももこ
画家。絵本作家。女子美術大学卒。
絵本や挿絵を中心に創作活動を行っている。
主な作品に「田んぼのいのち」(くもん出版)、
「俵万智3・11短歌集 あれから」(今人舎)など。
momokomo.net

先人たちの暮らしぶりが、私たちの文化の礎となる。
発掘調査はそれに気づく機会なのかもしれません。

昨年、新しい道路の建設予定地である小鶴地区で遺構が見つかり、春から夏にかけて発掘調査が行われました。

調査からは、建物の柱跡や磁器や陶器、刀縁金具などの遺物が多数見つかり、中でも木箱に納められた多数のさし銭(紐に束ねられた銭貨)は、茨城県内では初となる発見だそうです。

茨城町は道路や土地開発を行うと遺跡や遺構が見つかることが多く、これまでに埴輪製作遺跡としては国内最大級とされる小幡北山埴輪製作遺跡をはじめ、縄文時代の貝塚や、弥生時代の遺跡、中世の城跡など、古代から続く人々が暮らした痕跡が多数見つかっています。

表層をめくることで現れたものから、私たちは気づき、考えを巡らせます。以前九号で紹介した民族学者も、田畑の畔に土器が無造作に転がるのを見つけ、文化財にするように働きかけた、という話を残しています。

遠い未来。私たちが生きていた痕跡も、どこかで発掘されるかもしれません。しかし、今とは違う何らかの形で解説がなされると思います。例えば本は〝ある意図に沿い、著者の知識を集積し後世に残す〟ものです。埴輪や土器と形は違えど「伝え続けていく」ものには変わりありません。残り続けることで、土地の文化を色濃く表すことができるでしょう。

この冊子も、今の町の景色を伝えるものとして、後世に残せたらいいな、と思います。

Sun 第十四号　二〇一二年三月一〇日発行　企画・発行 いばさふるさとサポーターズクラブ事務局　iba3@town.ibaraki.lg.jp　TEL 029-240-7148

Sun

茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分
茨城県のほぼ中央部に位置します
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え
豊富な水と里山に育まれた風土です